

キャラクター名
イヴ・ルナティック

プレイヤー名

シンドローム	エグザイル		ワークス	水商売	カヴァー	娼婦→学生
	エグザイル					
オプション			年齢	11歳くらい	性別	女
覚醒	素体	衝動	飢餓	初期侵食率	38 %	
出自	天涯孤独	経験	汚れ仕事	邂逅		

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	31
肉体	4	0	1			5	行動値	5
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	5
精神	0	1	0			1	戦闘移動	10
社会	2	0	0			2	全力移動	20

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	15		射撃			RC			交渉	1	
回避			知覚	1		意志	2	1	調達	1	
運転:4 輪車			芸術:裁縫	3		知識:			情報:噂話	2	
運転:			芸術:			知識:枕事	4		情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
ミッシング・マキナ	白兵	7r+15	5	9		ヴィラン専用装備
[切り裂く…改め、ぶん殴る。]	白兵	12r+15		14		
60	白兵	13r+15		14		
80	白兵	14r+15		34		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ
聖徳館指定ジャージ		3			肉体判定ダイス+2

所持品	
思い出の一品	
ヒーローズクロス	

合計装甲: 3 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	ダイス	消費
ミッシング・マキナ (裏切りの正義)	P	N		
甲河アスカ	P 優しい人 (母性)	N 偏愛		
海道寺 弾	P 慕情	N 不安		
リーリエor夢乃鈴	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 6 残り財産P: 4

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
C:エグザイル	3	2	メジャー	-	-	対決	-	
効果:	C値[-Lv]							
異形の祭典	4	3	メジャー	-	Lv+1体	対決	-	
効果:	対象をLv+1体に変更							
強靱骨格	3		常時					
効果:	素手の攻撃ガード値+LV+1							
オールレンジ	5	2	メジャー	武器		白兵/射撃		
効果:	判定D+LV							
死神の手	5	4	メジャー			白兵/射撃	80	
効果:	攻撃+LV*4							
伸縮腕	1	2	メジャー	視界		白兵		
効果:	射程の視界化 判定D-3 (-LV)							
エンタングル	2	2	メジャー	武器		白兵		
効果:	ダメージを与えた相手に重圧							
壁に耳あり	1	1	メジャー			情報		
効果:	ダイス lv+1							
障子にメモリー	1							
効果:	【ハル】							
デビルストリング	3	6	オート					
効果:	オート打ち消し							
異形の暴食者	5	6	オート				120	
効果:	HPダメージ算出後 ダメージをLV+2D軽減 更にシーン中攻撃力を軽減したダメージの値+する。							
崩れずの群れ	1	2	オート					
効果:	カバー							
異能の指先	★	3						
効果:								

【切り裂く…改め、ぶん殴る。】《C:エグザイル》《異形の祭典》《オールレンジ》《伸縮腕》

【切り裂く…改め、ぶん殴る。】《C:エグザイル》《異形の祭典》《オールレンジ》《伸縮腕》《死神の手》 コスト13 装甲有効

オーラ: シーン登場の際、侵蝕率を上昇させるダイスを振った直後に使用する。そのダイス目を1、もしくは10に変更する。

プロフィール

誕生日: 不明 (FHセルにて培養液が入ったカプセルに赤子の状態で回収された。)

年齢: 11歳 (という事になっている)

血液型: AB型

身長: 98cm (義肢含み)

体重: 28Kg (義肢含み)

リョナ専の娼館に勤める幼女

出生については不明 (どこかの実験施設で廃棄されたデザインチャイルドと思われる)

右腕、両足をプレイによって失っており

残った左腕の指も残っていない・・・

歯は全て抜かれて、喉は女性器に改造されており性感帯もある。

狂った欲望を受け止めるだけの存在・・・

だが、彼女にとってそれが日常であり

自分を必要とする者へ、愛情を持って接する。

